

## ユニバーシアード冬季大会に2選手出場

### 日本代表 大森菜保子（スキー部）、南里美紗（フィギュアスケート部）

1月17日から27日まで、第23回ユニバーシアード冬季競技大会がイタリアのトリノで行われた。専大からはスキー部の大森菜保子（経済2・花輪高）がスキー・クロスカントリーに、フィギュアスケート部の南里美紗（文4・沖学園高）が公開競技のシンクロナイズドスケーティングに出場した。



▲スプリントで上位に食い込んだ大森

大森は、18日の女子5キロクラシカルでは30位に終わってしまったものの、20日に行われたスプリントフリースタイルでは11位と健闘した。24日のパシュートでは27位、26日のフリー15キロでは26位だった。

世界の壁は厚く、なかなか上位に食い込むことが出来なかった。しかしこの経験を糧に大きく成長した彼女が、2年後のユニバーシアード（中国ハルビン）で活躍する姿を見たい。

また、8位に終わった南里は「まだまだ新しい競技で、アジアからは1チームのみの参加でした。練習期間は短かったのですが、世界のトップチームが集まるなか、アジアの代表として恥ずかしくない演技を心がけました」と話した。

（荻野 敦子・文2）

## 氷上インカレ

### スピード部門で道下5000メートルで5位／フィギュア部門（女子）は総合6位

日本学生氷上競技選手権が、1月6日から9日まで、栃木県の日光霧降スケートセンターほかで行われた。専大は部門別総合のスピード部門（男子）で7位、フィギュア部門（女子）で6位の成績を収めた。

#### 道下5000メートルで5位

##### 【スピード部門】

道下雅史（経営2・白樺学園高）が5000メートルで5位、1万メートルで7位となったのをはじめ、2000メートルリレーで金澤将希（経済2・岡谷東高）・及川一也（経済1・釧路北陽高）・木幡哲也（経済1・標茶高）・杉本太一（経営4・白樺学園高）組が6位、1500メートルで及川が6位に入賞した。



▲日大と対戦（撮影・松本）

##### 【アイスホッケー部門】

1回戦で日大と対戦。手塚祐介（商4・日光高）、若狭健大（法4・苫小牧南高）が得点を奪うも2―7で敗戦。野村俊輔主将（経済4・白樺学園高）は「不本意な結果」と悔しがった。

（松本 かおり・文1）

#### フィギュア部門（女子）は総合6位

##### 【フィギュア部門】

女子の南雲麻実（文2・蒲田女子高）が15位、小松円（文3・高木学園女子高）が21位。男子では山中元人（法4・東山高）が21位だった。

（成清 千紗・文1）

## [スキーアルペン] 全日本学生アルペンチャンピオンスキー大会

### 安田が回転優勝

1月3日から10日まで全日本学生アルペンチャンピオンスキー大会が志賀高原スキー場で行われ、4日に行われた女子回転で安田かずみ(経営3・歌志内高)が優勝を果たした。大会を振り返り、「得意なコースだったので優勝を目指して試合に臨んだ」と話した。

そのほか、木田江里乃(経営1・北海学園札幌高)が9位。翌日の同種目2日目では、船渡千裕(法4・高山高)が7位。

また、安田はアルペンスキー蔵王ライザスラローム大会第1日(28日、山形市蔵王ライザスキー場)の女子回転で準優勝を果たした。

(荻野 敦子・文2)

## [レスリング] 全日本選手権

### フリー 荒木田準優勝 グレコ 矢野3位入賞

#### 先輩・田中に完敗

天皇杯全日本レスリング選手権が1月26日から28日まで、駒沢体育館で行われ、フリースタイル120kg級で荒木田進謙(経済1・光星学院高)が準優勝、グレコローマンスタイル84kg級で矢野将章(経済2・広陵高)が3位に入賞した。

荒木田は決勝で5連覇中の田中章仁さん(平16経済=FEG)と対戦。果敢に攻めたが、第2ピリオドでフォールを奪われ、敗れた。「優勝しか考えていなかったのが悔しい。自分から攻めたが、逆に一本取られた。簡単には勝たせてくれない」と振り返った。

(有馬 利香・商2)

## [卓球] 全日本選手権

### 原・杉田ペア3位

天皇杯・皇后杯全日本卓球選手権が1月16日から21日まで、東京体育館で行われ、混合ダブルスで原雅彦(商4・青森山田高)・杉田早苗(商3・四天王寺高)ペアが3位入賞を果たした。

1、2回戦を順調に勝ち進んだ原・杉田ペア。3、4回戦はフルセットの接戦を制した。しかし準決勝では谷口(シチズン時計)・大橋(サンリツ)ペアに2―3と惜しくも敗れ、決勝進出を逃した。

また、徳増信弥(経済1・杜若高)が豊田麻未(中京大)とペアを組み、ベスト8入りした。

(松原 弘和・法1)

## 《人 Zoom Up》

### 陸上競技部 長谷川淳（あつし）（経済4）

#### 強い意志と平常心 5区で培った自信

本格的に陸上を始めたのは中1の冬。元々は野球部だったが、小学生の時からマラソン大会などで優勝していたこともあり、友達に誘われたのがきっかけだった。

箱根では2、3年次に5区を、今年は1区を走った。第1走者というレースの流れを作る、重要区間を任されたが「一番きつと言われる“山登り”の5区を2回走ったことで、『どれだけペースが上がっても粘れる』という自信があった」と語るとおり、区間4位という素晴らしい成績で“襷（たすき）”をつないだ。

加藤覚監督は普段の長谷川を「物静かなおとなしいタイプの学生」と言うが、競技者としては「高い目標に向かってしっかりまい進し、努力する選手」と評す。普段は穏やか、そしていざ走ると、ぐいぐいと力強くチームを引っ張る。これは駅伝主将として心がけていたという「気持ちに余裕を持つ。

メリハリをつける」ことの表れだったのかもしれない。しかし、最初からうまくいったわけではなく、原因不明の呼吸困難に陥るなど、精神的負担からくる体の異変に悩まされた時期もあった。そんな中、「もっともリラックス出来たのは、寮の部屋で仲間と話している時」だった。何でも話せる、自分を落ち着かせてくれる存在がいつも周りにいた。次第に『力み過ぎない』ことを身につけていった。

卒業後は実業団へ進む。「まずはトラックで記録を出したい。最終的にはマラソンで、小さな大会でも“日の丸”をつけて走ることが出来たらいいと思う」。

12年ぶりのシード権獲得で、来年以降が大事になってくる陸上競技部。「後輩たちには上を目指し、団結して行ってほしい」と期待を寄せる。「何年か後になって、『あの人はすごかったね』と言われ続ける存在でありたい」。きっとこれから先も、その背中を誰かが追うはずだ。



駅伝主将／175センチ58キロ／A型／専大松戸高／目標とする選手＝徳本一善（日清食品陸上競技部）／卒業後の進路＝富士重工

（松本 かおり・文1）